

程を明らかにすることも社会言語学的に興味深い課題であろう。

以上述べたように、いわゆる「尻上がり」イントネーションは「話調」研究の第一歩として、談話におけるイントネーションの機能の解明の手がかりとなるばかりでなく、社会言語学の視座から「話調」を考える端緒になるものと考ええる。

本研究は最終的には、英語におけるCrystal & Davy(1969)、Crystal(1975)や渡辺(1985、1994)の談話タイプごとのイントネーションの型別出現頻度やポーズ、速度などに関する研究のように、談話ごとの韻律的特徴を明らかにしていくことを目指す。つまり、それは「話調」の実証的な比較研究であるとも言えるだろう。いわゆる「尻上がり」イントネーションの研究は、「話調」が確かに存在することを示すとともに、そのような研究が可能であることを端的に示す一つの事例である。ただし日本語のイントネーションについて英語における上記のような談話横断的研究を行うには、さらに多くの手順を踏まえる必要がある。具体的な研究方法は次の1-5で述べる。

1-5. 研究の手順

先に述べたとおり、本研究では、談話ごとに固有の「話調」が存在すること、つまり談話に固有の韻律パターンが存在するという仮説の検証を目的とする。いわゆる「尻上がり」イントネーションを取り上げるのは、そのためでもある。さらに、談話ごとのイントネーションを中心とする韻律構造を探ることを目指し、ニュースや小説の朗読、討論など各種の談話を取り上げ、そこに現れるイントネーションの型の分布やポーズ、発話速度などの韻律的特徴のありようを比較する。

ここでは特にイントネーションを中心とする各種の韻律的特徴を談話ごとに比較するための手続き、方法論について考察する。

1-5-1. 「話調」分析のためのイントネーション分析単位と記述方法

談話におけるイントネーションを比較するためには、第一に、分析の対象となるイントネーションをどのような単位で捉えるかという点が問題になる。

日本語ではイントネーションと言えば「文」レベルの現象であり、「文末」イントネーションを指すことが一般的であったことについては先に述べた。しかし、特に話し言葉に見られる言い淀みや対話者による割り込み、言葉尻を濁す言い方などの存在を考えると、「文」を単位にすることで、見落としてしまう重要な要素が多々あることに気付く。また、一つの文に一つの型のイントネーションしか現れないわけではなく、長い「文」になれば、いくつかの区切りが生じ、複数の非文末イントネー

ションが現れる可能性もある。いわゆる「尻上がり」イントネーションや「擬似疑問イントネーション」など、談話やコミュニケーション上特異な性質を持つこれら中止イントネーションを視野から外してしまえば、「話調」を扱うことはできない。したがって「文」を単位として、その文末のみに注目するという方法は適切でないと考える。

英語では、長い発話のイントネーションを考える時、「音調群(intonation-groups)」という単位に区切って考察するのが一般的である。ただし、Cruttenden(1997, p.29)によれば、「音調群(intonation-groups)」は、sense-groups、breath-groups、tone-groups、tone-units、phonological phrases、phonological clauses、intonational phrasesなど様々に呼ばれているという。そしてその境界も必ずしも音声上明確に現れているわけではなく、スタイルや発話速度によっても変わってくるという(渡辺1994、竹林1996)。しかし、竹林(1996, p.423)は、「音調群」は「生理的には呼気段落に対応する」としており、Cruttenden(1997)も音調群の境界の外的な基準としてもっともよく言及されるのがポーズであると述べている。

また、日本語の会話分析ではメイナード(1993)が会話における発話の細分化を調べるために Pause-bounded Phrasal Unit(ポーズによって区切られた語句。以下PPUと略す。) という単位を設定した。メイナード(1993, p.96-97)が指摘するように、ポーズの認定は比較的容易で、その確認も客観的にできるため、分割の基準として信頼できるからである。本研究でも筆者が実際にポーズの認定を行ったが、ほとんどの場合、ポーズの有無の判定やポーズの長さの測定は容易だった。ただし、非常に短いポーズの場合、後続句が無声子音で始まる時など、ポーズ長を正確に測定できなかつたり、「ポーズ有」と判断していいのか迷ったりすることが、ごくわずかだがあったことも事実である。実際、Cruttenden(1997, p.29-30)によれば「音調群」を明確に区切っていくことは難しいとの見解(Brown, Currie & Kenworthy(1980, p.46)と、「たいていの場合、音調群の境界は音声的な基準ではっきりと指し示すことができる」という見解(Crystal 1969, p.206)があるという。しかし、「真実はその中間にある」との立場を示したCruttenden自身は、外的基準によって音調群の境界が判断できれば理想的だが、実際の会話では外的基準がはっきり現れていない場合もあり、その場合は、内的基準(文法や意味)も考慮に入れるとの考えを示している。以上から、ポーズを一つの主要な目安と考えることは妥当なことだと言える。

またポーズを単位にする利点は計測の容易さだけではない。ポーズによって区切られた句は、普通「まとまり」の考えを表す「文」を構成する部分ではあるが、何らかの意味のまとまりがある。Chafe(1979)によれば、英語の場合、そのような意味のまとまり(foci)はandなどの接続詞から始まる句末イントネーション曲線によって表されるという。また日本語の会話においてはポーズによって区切られている箇所に相づちが打たれることが多く、メイナード(1993)が指摘するように「PPUの終り

は会話進行上大切な瞬間である」ことも事実である。またPPUの終りは非文末の各種の中止イントネーションや間投助詞が現れるため、イントネーションを「談話」レベルで捉えようという本研究にとっても有効な単位設定の方法であると考えられる。ただし、これは小磯他(1995)で指摘されたPPU内の相づちの存在、つまりポーズのないところにも相づちが見られることから提唱された下位発話単位(Subutterance Unit, SU)の有用性を否定するものではない。特に本研究で「昇降調」に分類した、いわゆる「尻上がり」イントネーションが相づちの刺激となっている可能性を示唆している点は看過できないが、朗読などの場合はもとより相づちがないため、音声を伴うか否かに関わらず相づちがあることをだけを前提に単位を設定することはできないし、ポーズの長さや質の違い、発話文の「意味」を考慮に入れることは、単位認定作業においてはあまり効率的だとは考えられない。したがって、本研究でも基本的な分析単位をこのPPUとすることにした。

そしてポーズ前の2拍に現れる音声パターンをその句の句末イントネーションとして分析を行った。国立国語研究所(1955)では、イントネーションは、「文末部が特に重要であり、句末部がそれに次ぐと考え」、「大体最後の2音節をとるに止めた」とあり、上村(1989)でも、「それぞれのイントネーションの型をおおきく特徴づけるのは、多くの言語において、主としてその末尾の部分に現れる音声的修正であり、日本語のばあいにも、特に最後の1音節に現れる音声の修正がそれぞれのイントネーションの型をおおきく特徴づける。」として、句末部の重要性を指摘しているからである。

また、杉藤(2001)によれば、好意的な「ね」と尋問の「ね」を持つ発話音声の、それぞれの「ね」に先行する部分を互いに付け替えた場合、下降調の「ね」を持つ方の発話は、「ね」以外が好意的な発話であっても全体としては尋問に聞こえ、逆にソフトな上昇調を持つ「ね」を持つ発話は、先行部が尋問調の一本調子な発話であっても全体は好意的な発話に聞こえるという結果が得られたという。他の先行部分に比した場合の終助詞イントネーションの影響力という点について杉藤(2001)は、終助詞のイントネーションが他とは独立して働き、発話全体の意味を支配することがわかったと結論付けた。本研究では終助詞のみならず、句末のイントネーションを重視するわけだが、この結果からも、句末部のイントネーションの重要性が、終助詞という一部分についてはあるが、実証されたとみなし得る。本研究で終末部2拍を重視したのは、最終拍のみでは統計的に処理する場合、情報量が不十分ではないかと考えたからである(結果的には最終拍だけでもかなりの精度が得られることがわかった。詳細は第3章参照)。

本研究では、PPUを単位に、ポーズ前2拍の周波数値、パワー値、各拍の長さなどの物理的数値をもとに統計処理を行い、1-3-2で述べたように6種類にイントネーションを分類した。従来、非文末のイントネーションは分析対象から除外される傾向があったが、「話調」解明には本研究で「昇降調」に分類した、いわゆる「尻上がり」イントネーションや、「上昇調」に分類した、いわゆる「疑似疑問

(「半クエスション」)などを無視することはできない。各イントネーション型の詳しい音響的特徴や文法上の機能などは第3章に譲るが、そこで各型の出現頻度(%)を各談話別に明らかにし、「話調」の一端を明らかにしていく。第4章では、イントネーション以外のポーズ長やピッチレンジなど他の韻律的要素に関しても言及し、「話調」を総合的かつ実証的にとらえ、談話と韻律の関係を明らかにする。

1-5-2. 分析対象の音声談話資料とその分析手順

これまで談話における韻律的特徴を明らかにするための具体的なイントネーション記述のあり方について検討してきた。本研究では統計的手法を利用してPPU末2拍分のイントネーションを6分類し、その上で各種の談話ごとに「型」の現れ方の異同や、発話速度、ポーズの長さや頻度などを探っていくと述べた。ここでは実際の分析対象とした音声談話資料とその分析のための具体的手順について述べる。

本研究ではテレビのニュース、子供向け童話朗読、一般向け小説朗読、対談番組の司会、対談番組での解説、討論番組での発言の6種の談話場面について男女各1名、合計12名の話者による音声談話を基本資料とした。出典や文字化テキスト、発話状況、話者についての詳細は第4章(特に4-1-2、表IV1)及び資料Bの通りである。

これらの資料はいずれもテレビ番組や市販の朗読CDから採録したものである。音声分析のために収録された音声資料ではないため、音質はあまりよくない。ピッチを計測するにはそれほど問題はないが、上記の朗読には効果音が入り、発話部分のピッチの計測ができない部分もあった。また、後3者は話し言葉ではあるが、全体的にやや改まった統制のとれた場面の話し言葉である。より砕けた場面や直接的な参加者が多い談話では対話者間の割り込みや笑い声などの雑音が増えてしまい、分析を困難にすることが予想されたため、今回は扱わなかった。また各資料は、男女各1名の話者の談話内容や状況がなるべく同じになるよう選んだ。発話者の社会的属性については、性別以外はおおよそのことしかわからない。全ての資料は共通語(アクセント)を話しているものに限った。

これら12名の音声資料は以下の手順で分析した。

<1> 録音テープを文字化した。1話者につき1~2分間の有声部分が取れるように、全体の発話から数カ所(冒頭部、中間部、終息部)を取り出した。ただしニュースは一つのニュース全体(約90秒)を資料とした。

<2> 取り出した音声については全て音声分析ソフト(東京外国語大学井上史雄研究室、及び鮎澤孝子研究室備付けの音声分析ソフト、東京大学音声言語医学研究施設開発「音声録聞見(MS-DOS版)」)

でピッチを抽出するとともにPPU末2拍については各拍末のF0値や拍内のF0のピーク値、パワー値を計測した。

<3> サウンドスペクトログラム(注6)でポーズの時間長、句(PPU)の時間長を計測するとともに、PPU末2拍については各拍の時間長も計測した。

<4> 測定ミスをチェックし、明らかに倍音を拾ってしまった箇所や途切れてしまった箇所を補足修正した。

<5> 各話者のピッチ、パワーなどのデータを標準化し、相互比較できるようにした。(標準化(standardization)とは、複数のグループ間での比較のために、偏差値のように各グループの平均が0、分散が1になるよう置き換える統計処理(石村他1997)のことである。)

<6> 以上の手順によって得られたデータをもとに判別分析を行い、句末イントネーションの類型化を試みた。(判別分析とは、各ケースが説明変数から作られた合成変量の値の大小から外的基準(目的変数)の示すどのグループに属するかを決める手法である(新村1997)。)

<7> 判別分析の結果から得られたイントネーション型の談話ごとの分布や談話ごとの韻律的特徴の数値データをもとに主成分分析及び因子分析を行い、「話調」の韻律面の実態を明らかにした。

以上の<1>～<6>までは第3章、<7>は第4章にあたる。なお、第2章は「話調」研究の具体化の一例として、いわゆる「尻上がり」イントネーションに関する音響音声学的考察および社会言語学的考察を行い、第5章では各章の結論と、近年の認知言語学の成果を踏まえた上でイントネーションの離散性の問題、談話における韻律構造、及び「話調」の言語学的な実態を本研究なりに総括した。

1-6. 本研究の位置付け

本章の最後に、本研究のイントネーション研究史上における役割と今後の課題について考える。

本研究は、これまで体系的に記述されることのなかった非文末のイントネーションである、いわゆる「尻上がり」イントネーションを、談話と韻律研究の接点として位置付け、その音調や機能について客観的かつ実証的に記述した点に第一の意義があると言える。

そして日本語のイントネーションの分類、記述方法について共通の見解のない中、イントネーションのより客観的な類型化のための方法を提示した点に本研究の第二の意義がある。ある程度の量の、物理的、客観的データを統計処理して判別分析を行い、イントネーションを分類するという方法は画期的である。従来の類型や記述と違い、客観データに基づく分類であるため、検証が容易で、さらに資料を増やして検討することも可能である。本研究で扱わなかったイントネーションの「型」や今後出現するかもしれない新しい「型」についても、ある程度の量の音声データが揃えば同様に分析